



Title	モールバラのウィリアム・モリス
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	デザイン理論. 1995, 34, p. 115-126
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53145
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

モールバラのウィリアム・モリス

藤田 治彦

京都工芸繊維大学

キーワード

ウィリアム・モリス, モールバラ・カレッジ, シルベリ・ヒル, エイヴベリ, 環境保全
William Morris, Marlborough College, Silbury Hill, Avebury, Conservation

はじめに

モールバラ校
シルベリ・ヒル
エイヴベリの環状列石
セント・ジェイムズ聖堂
ウォーター・メドウとケネット川
モリスにとってのモールバラ

はじめに

ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) とオックスフォードとは切り離すことができない。モリスは1850年代半ばにオックスフォード大学に学び、そこで多くの友人をえた。なかでもエクセター学寮の同級生で後の画家、エドワード・バーン＝ジョーンズ (Edward Burne-Jones, 1833-1898) は終生の友であった。もうひとりの親友となった建築家、フィリップ・ウェブ (Philip Speakman Webb, 1831-1915) と出会ったのもオックスフォードの建築事務所でのことである。またモリスはオックスフォードで—必ずしも幸福な出会いではなかったのだが—生涯の伴侶を見つけ、学生時代に住んだ学寮の目と鼻の先にある古い聖堂で結婚式を挙げた。モリスは、詩人であったことはともかくとして、工芸家兼デザイナーというオックスフォードの卒業生としては稀な職業を選んだが、その成功の陰にも多かれ少なかれオックスフォードの人脈と信用があったであろうことは想像に難くない。名声確立の後、1877年になるとモリスは周囲から母校の詩学教授ポストへの候補者に推され、1883年にはエクセター学寮の名誉フェローに選出されたが、同年秋のユニヴァーシティ・カレッジ・ホールでの講演では自ら社会主義者であることを初めて公言し、各方面からの非難を浴びもした。これだけの例でも十分のように、モリスの生涯とオックスフォードとは善かれ悪しかれ切り離して考えることはできない。

それでは、オックスフォード入学以前に在学していたパブリック・スクールおよびその所在地、モールバラとモリスとの関わりはどのようなだろう。モリス自身はウィーン出身の社会主義者、アンドレアス・ショイ（Andreas Scheu, 1844-1927）宛ての1883年の書簡のなかで次のように回顧している。「私はモールバラ・カレッジに入りましたが、それは当時の新設校で実に粗野な学校でした。学校での授業に関するかぎりでは、私はそこではほとんど何も学ばなかったといっても公正を欠くことにはならないと思います。というのは、実際ほとんど何も教えてもらわなかったからです。」また、モリスがモールバラ・カレッジ（以下モールバラ校と表記）に入学したのは、いうまでもなくオックスフォード大学進学のためであり、上記の本人による酷評に加え、その動機自体がモリス研究者にもモールバラを軽視させる結果になったと思われる。モリスが記しているように、それは当時の新設校で、同じパブリック・スクールでも例えばイトン校に学ぶのとはかなり趣を異にする。モリスのモールバラ人脈とでもいうべきものは、オックスフォードのそれと比べるなら皆無に等しい。私自身、モールバラおよびその周辺のモリスの足跡を調査するために2度モールバラ校を訪れているが、有意義な学内史料の発見や積極的な協力を同校に期待するのは無理なようだ。最初の訪問では、受付の女性がモリスがそこに学んだことを知っているのにまず驚かされた。だが、そればかりか彼女はモリスがモールバラ校を酷評したことも知っていたのである。2度目の訪問の際には、同校図書館のモリス在学当時の蔵書調査の希望を予め書簡で伝えておいたが、返ってきたのは、当時の記録は見当たらず来訪は徒労に帰すのではないかと、との丁重な断りの手紙であった。

だが、既に引用したショイ宛て書簡の続きの部分では次のようにも述べている。「しかし、同校の敷地は先史の遺跡が豊富に散在する非常に美しい田園のなかにありました。私は自ら熱心に、それらの探求と何らかの歴史を有するその他すべてのものの研究に着手しました²⁾。」また、続いてモリスはモールバラ校図書館の優れた点についても一言だけ触れている（それが上記の蔵書調査の根拠であった）。本論では、再度の実地調査に基づき、その西側に広がる田園地帯に散在する先史の遺跡、中世の聖堂、そしてモールバラ校とその敷地などをモリスの書簡を参考につなぎ合わせ、ひとつのイメージを組み立てるといふ、むしろ同校の外側からのフィールド・ワーク的アプローチによって、モリスにとってのモールバラの意義を再検討して行きたい。

モールバラ校

ウィルトシャー北東部に位置するモールバラはノース・ウェセックス・ダウンスのなだらかな起伏のなかにある小さな町である。ロンドンからバスを経てプリストルへと至る主要幹線A4上にあるとはいえ、鉄道路線から外れ、プリストルからさらにウェールズ南部の産業地帯

へと伸びる大動脈である高速道路M4からも遠く離れている。この地域のマーケット・タウンと説明されるが、モールバラ校が同地最大の施設であり産業でもあるかのような印象を与えるほど静かな、産業上の発展から取り残された町である。土地の人は「モールバラ」と、外の人では大概「マルバラ」と発音しているようだ。

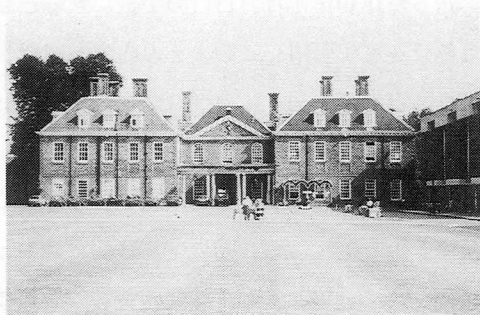


図1 モールバラ・カレッジ
開校以前からの建物（1995年撮影）

モールバラ校は1843年に設立された（図1）。1830年代から40年代にかけての鉄道建設ブーム

の時代に、ロンドンから西へ向かう鉄道はレディングそしてモールバラの北のスウィンドンを経て Bristol へ、さらにコンウォール半島のプリマスへと伸びようとしていた。レディングの手前、メイドゥンヘッドとタブロウとのあいだのテムズ川に架けられた鉄橋の上を蒸気機関車に牽引されて疾駆するグレート・ウェスタン鉄道の列車を画家ターナーが描く前年のことである。日本では《雨、蒸気、速度——大西部鉄道》として紹介されるあの有名な絵である。その路線から南に外れていたとはいえ、鉄道建設はモールバラ校設立の大きな誘因であった。

モリスは創設から5年後の1848年の2月にモールバラ校に入学した。英国国教会の牧師、郷紳、司法官や弁護士などを中心とした一群の人々によって設立された国教会系の学校であったが、モリスの父親は生前に同校への入学権利を息子の教育のために購入していた。当時まだ13歳の少年モリスは「エセックス州ウッドフォード・ホールのモリス夫人の息子、ウィリアム・モリス、14歳」として登録されている。同年の入学者は109名で、全学年あわせて500名を越える全寮制の男子校であった。開設年の入学者が199名で、その後しばらく施設の拡充は進まなかったとされるから、創設期の相当な混乱の時代にモリスはモールバラでの生活を送ったことになる³⁾。寄宿舎は陰鬱で、校内暴力などは日常茶飯事の学校生活であった。四半世紀後にモールバラ校に学んだバーン＝ジョーンズの息子フィリップへ宛てた1874年12月のモリスの手紙の内容からも、それはほぼ間違いない⁴⁾。現在では定評のあるパブリック・スクールのいくつかは20世紀初頭までこのような状態であったらしい。モールバラ校では杜撰な管理などのために1851年の11月についに全学的な反抗運動が起こり、モリスはクリスマス休暇を機に学校を去った。

このようなモールバラでモリスがもっとも大きな喜びを見い出した対象は、現存する書簡類の記述から判断すれば、その学内にではなく学外にあった。それはよほど新鮮で印象的な体験だったようで、30数年後に書いたショイ宛ての手紙のなかでも忘れずに触れているほどである。その内容は在学2年目のモリスがモールバラからウォルサムストウの実家に住む最愛の姉エマ

へ送った1849年4月13日付の手紙にもっとも詳しく述べられている。以下にその手紙の中心的部分をまず引用し、順次その内容を確認しながら本論を進めて行くことにする。傍点部分はモリス自身の強調、()内は本論筆者の補足である。

「……月曜日に私はシルベリ・ヒルに行ってきました。以前に話したことがあると思いますが、ブリトン人が築いた人工の丘です。でも、最初はドルイド教の環状列石とローマ時代の塹壕が町を輪状に取り囲むエイベリというところを訪れたのです。元来それらの石は次のように配されていたと考えられています。最初に大きな円環が、続いてより小さな円環がその内側に、さらにその中央に祭壇用にもうひとつが配されたと。実際のところは、石の大部分は取り去られてしまっており、私にはどうなのかわかりませんでした。火曜日の朝にそうだったと聞かされ、もう一度そこに行ってみたいと思い、実際に出かけ、そしてそれらがどのように築かれたのかを理解できました。目にするのできた最大の石は地面からおよそ16フィートの高さがあり、厚みは約10フィート、幅は12フィートほどあったと思います。環状列石と塹壕は半マイルほどに広がっていました。エイベリでは非常に古い聖堂も見ました。その塔は実際に極めて美しく、塔上には装飾式の四つの尖塔が立ち、下にはポーチがあって、その内側には線形のある美しいノルマン風の入口がありました。内陣は新しく、モザイクで舗装されていました。これを私は窓越しに見ました。というのは寺男の家がどこにあるのかを知らず、当然のことですが鍵を入手できなかったのです。教会のそばには美しい牧師館がありました。エイベリの名所を約半時間かけて見た後で、私たちはぬかるみの小道を通って、ひとつかふたつの水に浸かった牧野に入り、そして最後に、とはいっても決してあなどれない土地の人がウォーター・メドウ(湿地牧野)と呼ぶところを膝までつかって通って行きました。このような牧草地はあなたたちのところにはないから、まだウォーター・メドウがどんなのもか知らないだろうと思います。そこであなたに知ってもらうために、そこを横切ってゆくのがどんなに楽しいことかを述べましょう。まず最初に心に描かねばならぬのは、無数の小さな流れ、そう、約4フィート幅の流れが縦横に走っている原野です。牧草地を所有する人々は好きなきにこの水を流したりせき止めたりすることができて、一年のこの時期には、ちょうど草刈りのために草地を干上がらせるその直前なので、水は流れています。草は非常に丈が高いので、野原の土手にいる場合は別として、水に入り、水のなかをのたうつように進んでいくときにならなければ水があるのかわかりません。そこを私たちが通り抜けたときには、運よく泥沼ではありませんでした。さもなければ腰まで泥水に浸かっていたでしょう。これでウォーター・メドウがどんなのもか多分あなたは想像できるだろうと思います。この牧草地をかき分けて進んだ後に、私たちはシルベリ・ヒルに登りました。この丘はそれほど高くはないのですが、みんなで連れだって登りきるにはずいぶん長い時間がかかったに違いないと思います。私はその場所の思い出の品とし

て白い蝸牛の抜け殻を持ち帰り、私の紙入れにそっとしまったのでした⁵⁾。」

シルベリ・ヒル

15歳になったばかりのモリスが姉への手紙で語るシルベリ・ヒルはモールバラからA4を8キロほど西へ行ったところにある人工の丘である。いまなら自動車でも5分も走ると、南イングランドのダウズとしてはかなり樹木が成育し

たモールバラ地域の西端部にあたるウォーデン・ヒルの木々の緑が切れるあたりで、その頂上部が平らになった円錐形の特異な姿を車のフロント・ガラスに現わす。方角によってはより丸みのある、いわゆるお椀を伏せた形にも見える(図2)。その高さは約40メートル。モリスは「それほど高くはない」と記しているが、先史時代のヨーロッパでもっとも高い現存構築物である。底面の直径は170メートルにも及ぶ。現在までにボーリング調査などにより、シルベリ・ヒルは約5メートルの高さに積み上げられた中心部の砂礫と土と粘土の層を被うように、切り出した白堊(チョーク)のブロックを密に積み上げて階段状の円錐形ピラミッドをつくりその段部を白堊を砕いた割りぐり石で埋めて表面をなだらかに仕上げた構築物であることがわかっている⁶⁾。1776年の頂上からの最初の試掘以来ボーリング調査は長く行われていなかったが、まさにモリスがシルベリ・ヒルに登った1849年に側部からの水平ボーリングが試みられているのが興味深い。その建設の目的はいまだに不明だが、先史時代の女神信仰や太陽崇拜などと結び付けた諸説が唱えられている⁷⁾。

モリスが語る「ブリトン人」というのは、一般的にはグレート・ブリテン島南東部に住んでいたケルト系民族を指す。ケルト自体、北東ヨーロッパからブリテン諸島へ渡ってきた民族であるから、紀元前2700年から2400年ほどのあいだに建設されたという説が有力なシルベリ・ヒルをブリトン人が築いたという説明は厳密なものではない。むしろ、先史ブリテン人というべき、あるいはモリスはその意味で使ったと考えるべきだろう。グレート・ブリテン島南東部には紀元43年に古代ローマ軍が侵攻し⁸⁾、そこ住んでいたブリトン人はその支配下に置かれた。5世紀にローマ人が去ると、北ヨーロッパからアングル人、サクソン人などが侵入し、ケルト系ブリトン人は西や北の辺境へ、つまり現在のウェールズや「角の形のウェールズ」を意味するコーンウォールへ、そしてスコットランドやアイルランドへと逃れた。

モリスの家は、中世以来イギリスの支配階級を形成するアングロ=サクソン系ではなく、ウェールズ系であった。モリス自身そのウェールズ系の空想を好むロマンティックな気質を十分

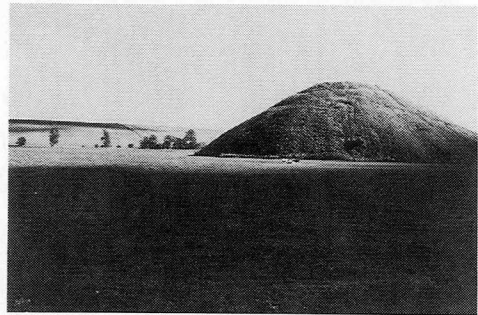


図2 シルベリ・ヒル
先史ヨーロッパ最大の人工の丘

に備えており、歴史好きの性格も相まって、自分がウェールズ系つまりケルトの血を引くイギリス人であることを強く意識していただろうと思われる。フィリップ・ヘンダーソンはモリスが既にモールバラ校時代から空想物語を次々と頭のなかで作り始め、そのためか、あてどなく歩き回ったり独り言をいったりするのを見て他の生徒たちが彼を「頭のおかしなウェールズ人」だと思ったと記している⁹⁾。シルベリ・ヒルやエイヴベリの探索に見られる先史時代のイギリスへのモリスの興味は、自己の探求と重ね合わされていたのであろう。

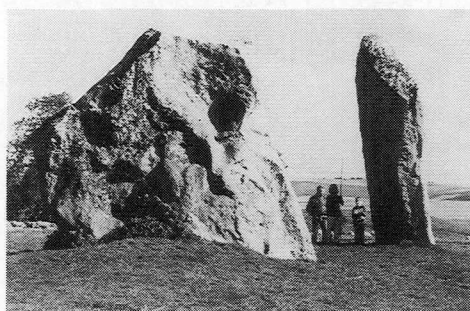


図3 エイヴベリ
環状列石の一部

エイヴベリの環状列石

モリスが姉エマに「エイベリ Abury」と書いたのは現在の「エイヴベリ Avebury」のことである。19世紀以前の古文書や古地図には「エイベリ」あるいは「オーベリ Aubury」としての記載も見られるので、モリスが間違っていたわけではない。そのエイヴベリはシルベリ・ヒルの北1.5キロほどのところにあり、その大規模な環状列石によって知られた小さな村である(図3, 4)。モリスが「町」と記しているのはもちろん記憶違いなどではなく、エイヴベリは19世紀後半に規模上そのひとつのピークを迎えていた。現在は100名ほどの村の当時の人口は300名を越えていた。

「ドルイド教」というのはガリアやブリテン島のケルト民族のあいだで信仰されていた宗教だが、「ドルイド教の環状列石」という説明は時代上厳密ではない。また、モリスのいう「ローマ時代の塹壕」が環状列石の外側を同心円状に取り巻く大きな壕や土堤を意味しているとするれば、それも間違いである可能性が高い。現在では、エイヴベリの壕が掘られたのは紀元前2600年から前2500年のあいだ、列石が立てられ始めたのは前2400年頃と推定され、約30キロ南にあるストーンヘンジよりも古いと考えられている。しかしながら、モリスの推測が正しいか間違っているかは別として、初めてそこを訪れたその翌日に再訪する探究心の強さはモリス特有のものである。エイヴベリの列石の多くは、キリスト教の時代になると、その異教性を恐れる村人によって焼かれ、砕かれ、あるいは埋められたりしてその原形を大きく崩し、既に17世紀から一部の好古家や王侯貴族の興味の対象とはなっていたものの、モリスがそこを訪れたころまではあらゆる想像を許すほどに手付かずの状態にあった。エイヴベリの遺跡で、若きモリスは少なくともイギリスの歴史の重層性を身をもって、あるいは想像的に、体験しているので

あった。

セント・ジェイムズ聖堂

モリスが「非常に古い聖堂」と述べているのは、エイヴベリの村の西部、環状列石と壕のすぐ外側に現存するセント・ジェイムズ聖堂である（図5）。それはモリスによるイギリス史の重層性の緻密な観察のさまがもっともよく伝わる部分である。手紙に記された「装飾式の四つの尖塔」も「ポーチ」も、ほぼ当時のままでいまも残っている。その比較的新しいポーチの内側には、モリスが語っている通り、線形のある美しいノルマン風の入口がある（図6）。

セント・ジェイムズ聖堂は、その現在の建物は大部分16世紀以降のものだが、エイヴベリの環状列石ほどではないにせよ、さらに古い歴史を有している。現在の建物の内外に、15世紀および13世紀後半に建設された部分、そしてノル

マン様式、さらにさかのぼってサクソン様式の壁や窓の部分あるいは基礎などが発見されている。したがって、現在ではその同じ敷地に少なくとも5つの新旧の聖堂の存在一あるいは過去に存在したことが確認されているのである。この聖堂は古い時代の構造物の上に新しい建物を重ね、古い壁に窓を開け、あるいはその窓を塞ぐ、といった増改築を繰り返しているためにその内部の数箇所には奇妙なディテールが見られる。例えば、サクソン風の窓の下端部にノルマン風の別の窓枠が食い込み、その新しい窓枠自体も多分ゴシック期あるいはそれ以降の造作によって断片化されている部分などがある（図7）。モリスは鍵がなくて聖堂内部に入ることができなかつたにもかかわらず、内陣が新しいものであることを見逃さず、床のモザイクも窓越しに観察していた。後にいわば工芸百般に通じることになる人物にふさわしい若き日の文面である。

おそらくモリスは既にその外側から、その聖堂が歴史のパッチワークであることを、多分エイヴベリという空間的にも時間的にもより大きな文脈のなかで、洞察していた。それは必ずしも正鵠を射てはいないので、むしろ、ひとつの歴史的な物語を見ていたと言うべきかもしれない。先史ブリテンの民が建設した環状列石とブリテン島に侵入した古代ローマ人がその周囲に掘っ

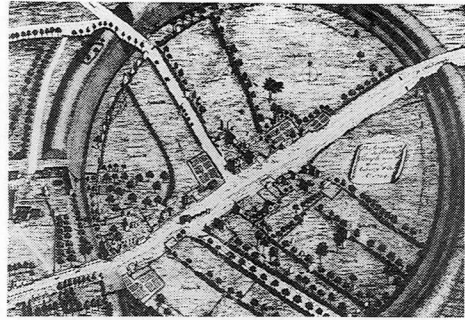


図4 ウィリアム・ステュークリーによるエイヴベリの鳥瞰図、1724年
左端部にセント・ジェイムズ聖堂が見える



図5 セント・ジェイムズ聖堂、エイヴベリ
現在の建物の主要部は16世紀以降のもの

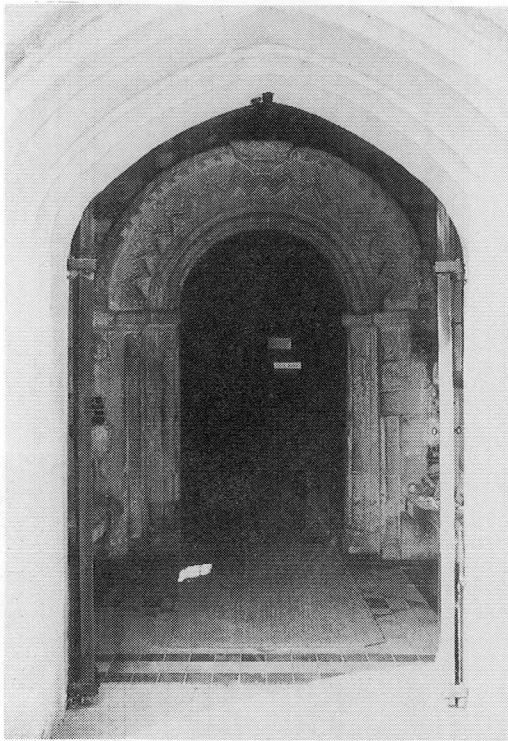


図6 セント・ジェームズ聖堂
ノルマン様式の入口が新しいポーチの奥に見える

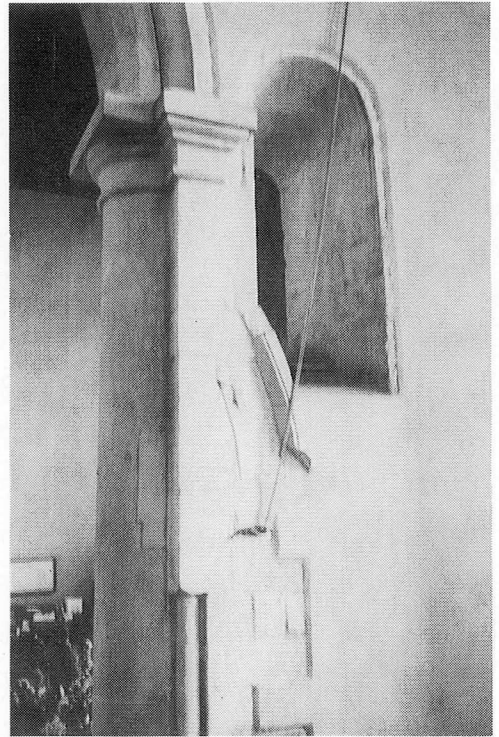


図7 セント・ジェームズ聖堂
各時代の断片がコラージュ状に残る

た一とモリスが考えた一壻壕。モリスがその系譜上にいるケルト系ブリトン人を辺境へと追い払ったアングロサクソン人がその西端に建設した聖堂に加えられた11世紀の侵入征服者ノルマン人による大規模な改修。さらにその上に重ねられるゴシックの諸形態、などの造形の歴史の積み重ねである。文面から判断するならば、モリスは単一の歴史的事実や事物よりも、歴史の連続性、そしてそれ以上にその重層性に興味を示している。それはその後、個人的な興味を超えて、無思慮で強引な単一樣式への「修復」に対する、あるがままの古建築物の保護という公共的な運動へと発展して行くものでもあった¹⁰⁾。

ウォーター・メドウとケネット川

モリスが姉エマへ送った手紙に記された場所のなかで、唯一「ウォーター・メドウ」だけはまだ特定できていない。しかし、モリスの記述とエイヴベリ周辺の地形から、ほぼこの辺りのことであろうと推定することはできる。それはエイヴベリの西を流れ、シルベリ・ヒルの東で南からの流れと合流して東へ向きを変えるケネット川の、エイヴベリとシルベリ・ヒルとのあいだの流域部分である（図8）。「ウォーター・メドウ」とは一般的には河川の氾濫によって土



図8 ケネット川流域
地平線上にシルベリ・ヒルが小さく見える

地が肥沃に保たれている牧草地を意味し、おそらく太古の流域住民が自然に身に付けた農耕牧畜法の一部であった。

ケネット川はその後モールバラ、ハンガーフォード、ニューベリを通して東へ東へと流れ、レディング付近でテムズ川に合流する。モリスがデザインし1883年に登録された綿プリント《ケネット》は、この若きモリスが愛した先史ブリテンの土地エイヴベリを、そしてモリスが学んだモールバラを通してテムズへと注ぐケネット川の名に因んだものであろう（図9、10）。モリスは1883年にサウス・ケンジントン博物館が購入した17世紀イタリアのカット・ヴェルヴェットを参考に、植物の蔦や茎がS字型に連続して波打つパターンをデザインを綿プリントと壁紙用に多数デザインした。そして、その流れ

るようなイメージに合わせたのであろうか、それら一連の作品にイングランド南部を流れる主な河川—その多くはテムズの支流—の名を冠した。《ケネット》は単にそのひとつであり、作品が先か命名が先かを判断することも困難である。だが、そのインディゴ抜染されたいささか古代風の下地の上を流れるように這う細いS字曲線と丸い花房に、ケネット川とエイヴベリやシルベリ・ヒルなどの先史遺跡が散在するその流域のイメージを重ねることはできるだろう。

モリスにとってのモールバラ

従来、モリスにとってのモールバラの意味は、既に述べたような理由から、真剣に問われることはほとんどなかった。だが、モリスは1848年2月から1851年12月までの4年近くをモールバラで過ごしたのであり、それはオックスフォードでの在学期間よりも長い。モールバラはモリスの歴史と自然への興味を育み、それはラスキンからの影響に先立つ。また、シルベリ・ヒルやエイヴベリなどの先史遺跡群はモールバラと深い関わりを有しており、モリスがそれらの遺跡に頻繁に足を運んだのは単なる偶然ではない。

モールバラ校の敷地内にはモールバラ・マウンド（あるいはマウント）と呼ばれるやはり先史時代の人工の丘があり、シルベリ・ヒル同様ケネット川流域に位置する相互に関係のある遺跡だと考えられている。エイヴベリ遺跡群の初期の研究者のひとりであるウィリアム・ステュ

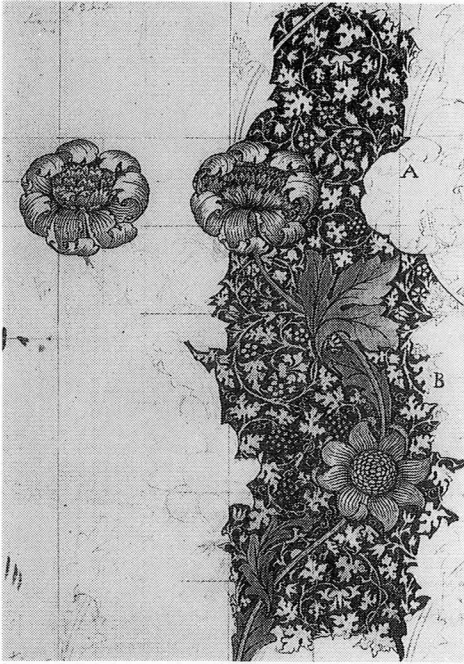


図9 《ケネット》の下絵 1883年



図10 綿プリント《ケネット》 1883年

ークリーはそのモールバラ・マウンドを鳥瞰図に描いているが、それは19世紀にモールバラ・カレッジの敷地となるハートフォード卿邸の記録であった（図11）。モールバラ・マウンドは19世紀初頭に樹木に覆われ始め（図12）、現在ではかつてそれが人工の丘であったことは外観からはまったく判定できない状態にある。だが、モリスがモールバラ校の図書館でエイヴベリについてのステュークリーの著書に親しんでいたことも、両遺跡の関係に気付いていたであろうこともほぼ確かである。モールバラはそれ自体、ウィルトシャーの遺跡群の一部であり、モリスにとって格好の歴史と自然への小さな旅の出発地であり帰還地であった。ウィルトシャーの自然とエイヴベリを中心としたその遺跡群はモリスの歴史観と自然観の形成に重要な役割を果たし、設立後まもない小さなモールバラ校自体がそれを、本論で示したような意味で、内包していたのである。

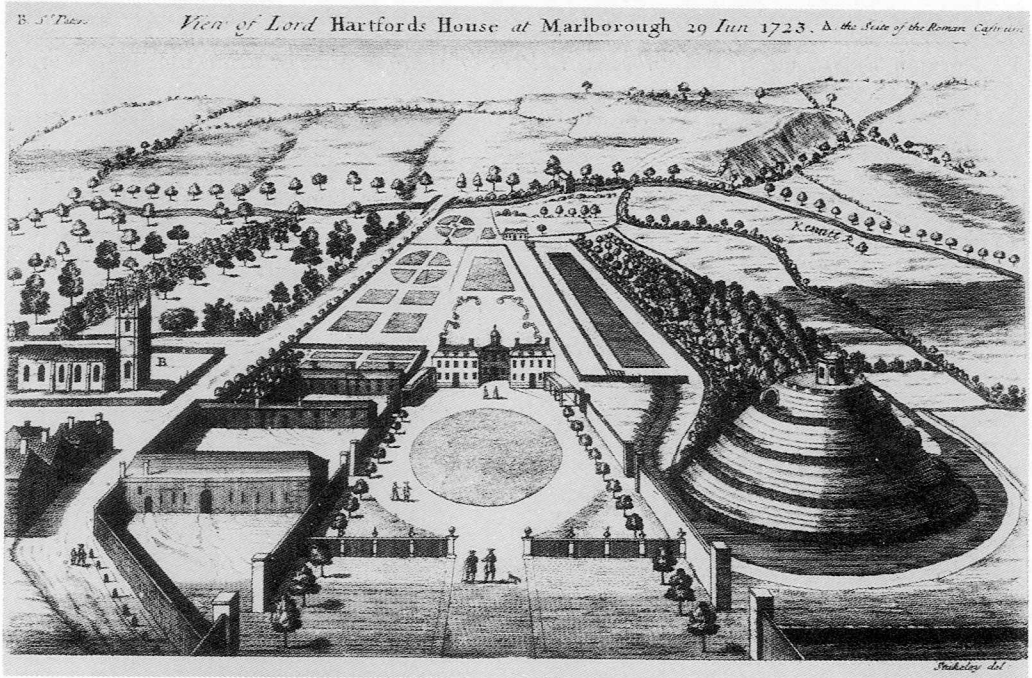


図11 ウィリアム・ステュークリーによるモールバラのハートフォード邸のスケッチ，1723年
現在のモールバラ・カレッジの敷地で，右端部にモールバラ・マウンドが描かれている

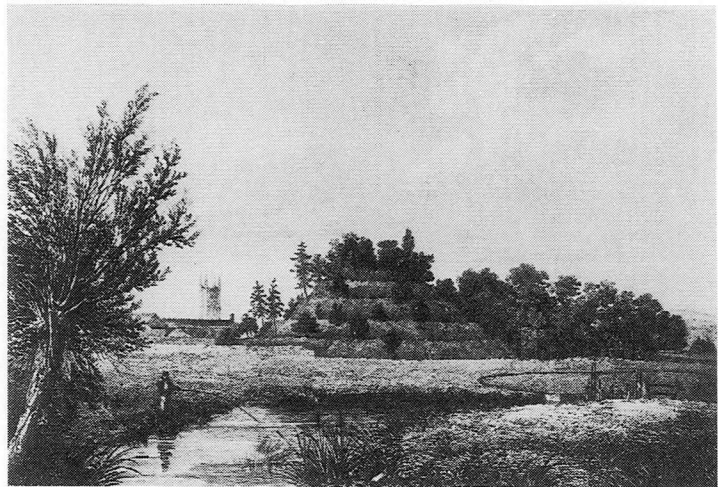


図12 モールバラ・マウンド，1810年
R・C・ホア『北ウィルトシャーの古代史』より

註

- 1) Norman Kelvin (ed.), *The Collected Letters of William Morris*, Princeton, 1987, Vol. II, p. 227.
- 2) *ibid.*, p. 228.
- 3) Fiona MacCarthy, *William Morris, A Life for Our Time*, London, 1994, pp. 30-32.
- 4) Norman Kelvin (ed.), *The Collected Letters of William Morris*, Princeton, 1984, Vol. I, pp. 241-242.
- 5) *ibid.*, pp. 6-8.
- 6) Michael Dames, *The Silbury Treasure*, London, 1976, pp. 39-49.
- 7) *ibid.*, pp. 144-176.
- 8) ローマ軍は紀元前55年にグレート・ブリテン島へ初上陸、翌年本格的に再侵攻したが、前49年までに一旦撤兵していた。
- 9) Philip Henderson, *William Morris, His Life, Work, and Friends*, London, 1967, p. 8.
- 10) モリスはフィリップ・ウェブらと協力して1877年に古建築物保護協会を創設、同協会はロンドンを本拠地に、現在でも活発な保護（保存）運動を展開している。